

舞踊学会 基調講演 要旨

『死の舞踏 (Danse Macabre)』の成立と変容—行列からダンスへ—

國學院大學客員教授 小池寿子

15世紀から16世紀にかけて、ヨーロッパのほぼ全土で流布した「死の舞踏」は、死者と生者の対話形式の詩文をとまなう説教のための絵解き図である。そこでは、死者が生者を墓地へと誘う姿が、踊るような足取りの行列、ないし輪舞として表現された。墓地回廊や聖堂の壁画として描かれたのをはじめ、彫刻、写本挿絵、そして版画としてもっとも広範に伝播し、多くのヴァリエーションを生んだ。時代が下るにつれ内容には変化があるが、世の無常、終末に向けての悔悛の勧め、そして、死の前の平等性と万人の死を説くことを旨とする。

このテーマについては19世紀前半以降、文学、言語学、歴史学、社会学、美術史などの各分野において研究がなされ、文学系譜と図像の意味内容については解明が進んでいるが、個々の作例の詳細な分析、また成立過程、伝播経路や媒体、機能などについてはいまだ検討の余地を残している。講演者は「死の舞踏」を、説教者を冒頭に行列が展開するフランス型系譜と、納骨堂および説教者を冒頭に展開するドイツ型系譜に大別し、個々の造形の検討を重ねてきたが、本講演では、「死の舞踏」は実際に踊られたのか、という本テーマの核心に焦点を当てながら、各地の代表的な造形作品を見てゆく。

そもそも「死の舞踏」が実演されたか否かについては19世紀前期から議論になってきた。その根拠は最初の「死の舞踏」に関する『パリ—市民の日記』(1404~49年)の記録にある。

「ひとつ、1424年、(パリ)サン・ジノサン墓地において、ダンス・マカーブルが制作された (faire)。それは8月頃始められ、翌四旬節に完成した。」

このフランス語動詞 faire は英語の do に当たるため、果たして描かれたのか、踊られたのかは判然としないものの、8月から翌年四旬節(2月)まで半年もの間、踊られたとは考えにくく、また同『日記』の1429年の項では、「死の舞踏」は壁画として記されているため、1424年8月から半年余りで描かれたと解釈されてきたのである。

しかし、舞踏ないし演劇説を否定できないのは、実際、1449年9月にブルージュのブルゴーニュ宮廷で、1453年7月にはブザンソン大聖堂で演じられた記録がある上に、以降の歴史資料にも踊られたと記される場合があるからだ。

当時のパリは、百年戦争下で荒廃し、イングランド・ブルゴーニュ派によって制圧されていた。サン・ジノサン墓地に隣接する「牢獄」(Chatelet)では、公開処刑とパントマイムなどによる宗教劇が行われており、墓地と共にその界限は、いわば「スペクタクル」の中心地だったのである。「死の舞踏」がいかなるパフォーマンスだったのか、そのいくつかの可能性を提示したい。